



Vol.32・33
March 2021

A r t & C u l t u r e



大学院・デザイン研究科長
文化・芸術研究センター長

的場 ひろし

MATOBA Hiroshi

文化・芸術研究センターの 現在とこれから

文化・芸術研究センターは、本学の文化政策学部とデザイン学部の二つの学部を融合させた本学独自の研究体制を推進させることと、研究成果の発信や社会との交流を行うことを目的として活動しています。私は、2020年4月からこの文化・芸術研究センターのセンター長を務めることになりました。ご承知の通り、2020年はコロナ禍によって、社会が大きな影響を受けた年になりました。本学では、前期期間の授業は全面的に遠隔の形式で実施し、後期期間は教室定員を見直すなど、様々な配慮や工夫を重ねた上で、慎重に対面形式の授業を再開しています。文化・芸術研究センターにおいても、コロナの問題に適切に対処するために、活動の見直し等を行いました。

センターの活動の一つであるピチャラ会は、2016年に横山俊夫学長の発案によって始まり、前任の二人のセンター長（池上重弘教授、峯郁郎教授）の尽力で続けられてきました。ピチャラ会は、様々なテーマについて気のおけない対話の機会を提供する場として、これまでに約40回の開催を数え、学内外に好評を博してきましたが、2020年に入り一旦お休みすることになりました。今後のコロナの情勢を見ながら、場合によっては開催形式の変更も検討して、できるだけ早期の再開を図りたいと思っています。また、2001年より本学で毎年行われてきた大規模な行事「薪能」（屋内での開催時には「ロウソク能」）も中止して来年度に改めて実施する予定となり、今年度はこれまでの20年に渡る活動の歴史を振り返るパネル展示が行われました。このような中で、開催内容に若干の変更を加え、感染症対策を充分に行った上で、実施に至った行事もあり

CONTENTS

活動報告 SUAC Report

- 地域資源としての古文書を考える 一川 根本町殿岡家文書の調査—
西田 かほる / 国際文化学科 2
- LMS (learning management system)を用いた遠隔講義
野村 卓志 / 文化政策学科 3
- 病衣のデザイン—伝統とアノニマス 藤井 尚子 / デザイン学科 4
- 領域横断のゼミ学生等地域貢献事業への取り組み
黒田 宏治 / デザイン学科 5
- 「手の愉悦～革新する工芸」展 山本 一樹 / デザイン学科 6
- 『老舗企業の存続メカニズム』受賞報告
および国際比較研究について 曾根 秀一 / 文化政策学科 7
- 令和元年度 文化・芸術研究センター事業実績 8~11
- 工芸展関連企画「先端技術展—技人(わざびと)たちの物語—」
峯 郁郎 / デザイン学科 12

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●https://www.suac.ac.jp/

ます。本ニュースレターで詳しく報告されている「手の愉悦～革新する工芸」展とその関連事業である「先端技術展—技人(わざびと)たちの物語—」の開催は、本学の活動が衰えていないことを学内、学外に印象付ける出来事になりました。

ここで、現在の文化・芸術研究センターの構成員についても簡単にご紹介しておきたいと思います。2017年に初めて当センターに専任教員が着任して以来、若干の変動を経て現在は、古代ペルシア発祥のゾロアスター教や、イスラームに関する研究を専門とする教員と、観光学分野、特に国際観光政策の研究を専門とする2名の専任教員が所属しています。それぞれユニークな研究活動を背景に、本学の文化政策学部内に学科を横断する形で開設された文明観光学コースの中心となって教育に携わり、加えてデザイン学部の専門科目へのゲスト登壇等の機会を通して、デザインを学ぶ学生にも知的な刺激を与えています。この他に、デザイン学部との兼任教員として、センター長を含めた2名が両学部の連携や本学と地域の連携等を推進しています。現時点のセンターはこれらの教員で構成されていますが、センターの様々な活動が、企画室や地域連携室を中心とする事務局の方々の力に支えられていることは言うまでもありません。

今後、文化・芸術研究センターは、遠州学林グローバルデザイン研究所（仮称）に発展し、構成員も増員し、研究や地域連携に関する機能を拡充させていく予定です。地域との連携の強化を行うためには、本学の研究活動と関係のある様々な拠点との関わりを深めることが重要ですが、浜松市の中心部に立地する本学は、この点で大変恵まれていると言えます。まず、歩いて行ける範囲の距離に、市が運営する美術館、科学館、楽器博物館があります。また、本学自体に理系の学部はありませんが、静岡大学浜松キャンパス、浜松医科大学、光産業創成大学院大学等、先進的な理系の大学が近隣に位置しています。そして、この地域には光産業、楽器産業、自動車産業等を担う重要な企業が集まっています。本学はこのような地の利を活かし、文化施設、大学、企業等との連携を進めてきましたが、新たな研究所では、拠点同士の人のつながりを大事にして、一層関係を強化していきたいと考えています。もちろん地域との連携の範囲は、浜松周辺に限らず、静岡県内全体で、また三遠南信という文化的なまとまりの中でも積極的に考えたいと思います。そして広く国内外において、連携と情報発信の活動を行っていきたく考えています。

地域資源としての古文書を考える

— 川根本町殿岡家文書の調査 —

西田 かほる (国際文化学科)

2019年度から「地域資源としての古文書を考える」として、川根本町教育委員会と連携し、川根本町千頭の殿岡家が所蔵する史料の調査を行っている。本学教員特別研究とふじのくに地域・大学コンソーシアムのゼミ学生等地域貢献推進事業の助成を得て実施するもので、史料の概要目録を作成することにより、史料の散逸を防ぎ、地域資源としての史料の活用方法を探ることを目的とするものである。

殿岡家文書は『本川根町史』を編纂した際に調査され、そのうちの半数ほどにあたる2,000点余が『静岡県榛原郡本川根町所在文書目録』第4集(本川根町、1999年)として刊行されている。文書群の大半は、明治期に千頭村戸長および榛原郡会議員を歴任した殿岡嗽石(1851—1933)によって蓄積されたものである。嗽石は金原明善とともに植林事業を行ったほか、山林経営、茶業組合、大井川鐵道の敷設、地域郵便局の開設・運営に関わった、いわゆる地方名望家である。本史料群は、特に明治期から昭和初期の当該地域の歴史・産業・生活を考える上で、さらには周辺地域とのつながりを解明するうえでも重要なものである。

今回の調査は、本川根町史編纂時には確認されていなかった茶箱類41箱と文書タンスに収納されている古文書・掛け軸など約4,000点余が対象である。最終的には、既整理分・未整理分を含め1万点弱の史料群になるのではないかとと思われるが、この大量の史料を今後どのように保管し、活用していくのが、所蔵者にとっても川根本町にとっても大きな課題となっている。目的に記したように、今後、地域の方が史料を重要な地域資源と認識し、活用していくことができるよう、まずは史料調査を行うことによって史料群の全体像を把握する必要がある。

調査は、国際文化学科西田ゼミ・水谷ゼミ(日本近世・近代史)の学生および静岡大学の院生や有志の参加を得て行っている。2019年度は現地に赴き2泊3日の合宿調査を9月と11月の2回にわたり行った。嗽石が敷設に力を注いだ大井川鐵道に乗り、殿岡家で行った現地調査は、学生にとって古文書が生み

出され、保存されてきた家や地域に触れながら歴史を学ぶ機会となった。2020年度は新型コロナウイルス感染症への対応として現地での調査を断念し、大学へ史料の一部を借り出してゼミごとに調査を行っている。調査では、史料がどのように保存されていたのかを簡単に記録した上で、文書を1点ごとに中性紙封筒へ収納し、目録を作成する。目録は、内容、年月日、作成者などの情報を読み取って用紙に記入し、その後データ化して検索が可能な形にするもので、現在、2,000点余りの史料を整理した。調査に参加することも、史料を読むことにも不慣れな学生が多く、辞書を片手に四苦八苦を続けているものの、学生たちのやる気と堅実さは頼もしい。遅々たる歩みであるが、今後とも着実に調査を進めていきたい。



史料保存状況



調査風景 (2019年9月)



調査風景 (2019年11月)

LMS (learning management system)を用いた遠隔講義

野村 卓志 (文化政策学科)

新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の全世界的な広がりにより、日本においてもさまざまな対応をする必要に迫られることとなった。これより、多くの大学において2020年度前期は開講の時期を遅らせた上で遠隔講義への切り替えをすることとなった。本学でも、開講時期を4月から6月に遅らせた上で全学的に遠隔形式の講義を採用した。

これに先立つ2018年度から、教育の質を向上させることを目的として、LMS (learning management system、講義支援システム)を全学的に導入した。LMSでは講義ごとに専用のページを設けている。受講している学生は、このページ上で受講日の講義に使用する資料、写真や参考リンクなどを閲覧し、あるいは課題や小テストに回答し、電子掲示板を使って感想や質問を書き込むことができる。また、教員はこの掲示板で質問に回答する。LMSの導入により、紙ベースで行っていた資料配布やコメントペーパーの回収を電子的な形で行えるようになった。また、学生にとっても講義資料やリンク等を参照することがより容易になり、講義中だけでなく講義前後の学習にも効果が見込まれる。

導入から2019年度末までの2年間の間に、本学の60%程度の教員が何らかの形でLMSを利用するようになり、講義でLMSに触れる学生の割合も増えつつあった。この下地があったことは、2020年度にCOVID-19によって全学的に遠隔講義をすることになった時にも、対応の困難さを緩和する効果があったものと思われる。

遠隔講義には、TeamsやZoom等の電子会議システムを用いて講義を行ない、必要であればその場で学生とやりとりが可能な形態であるリアルタイム型と、YouTubeなどの配信サービスに講義を収録したビデオ資料等を掲載し、学生がそのビデオ資料を視聴して受講するオンデマンド型とがある。また、これらを併用する形態も考えられる。どちらの講義形態においても、資料の配布や電子会議システムのリンク、あるいは配信サービスのビデオのリンクを示すのにLMSは有用である。

本学では情報リテラシー系の科目を担当しており、ワードプロセッサを用いたレポートの書式作成、メール配信やインターネットの安全性、エクセルを用いた統計データ処理、フォトショップを用いた画像処理、またインターネットが社会に与える影響を論じるなどの講義を行っている。これらの講義を行うにあたって、形態としてはオンデマンド型を選択した。

遠隔講義に向けて、これまで対面講義で使用してきたパワー

ポイントを元にして、これに音声を吹き込む形でビデオを作成した。しかし、ただ音声を入れるだけでは十分ではなかったため、学生の学習が容易になるようにスライドの構成を見直した。また、比較的小さなウィンドウやスマートフォンで閲覧することも考えて、操作するPC画面の当該部分を大きく表示するように様式を改めた。

COVID-19の感染の広がりがきっかけとなって行った遠隔講義ではあったが、実際にオンデマンド形式で講義を行ってみたいところ、情報リテラシー系の科目では利点が大いことがわかった。

対面形式の講義では教室のPCの台数が限られるため、同一内容の講義を複数開講しているが、時間割の関係もあり受講を希望する学生を全員収容することができないケースもあった。しかし、オンデマンド講義では人数調整の必要はなく、各時間帯を希望する学生の全員に受講してもらうことができた。

教室では座った場所によっては板書やパワーポイントのスクリーンが見づらいこともあるが、オンラインでは自分専用の画面に表示されるためにスクリーンが見やすく講義に集中できる利点もある。

情報リテラシー系の科目では学生によってコンピュータ操作の習熟度に大きな差があるため、講義の進行ペースの設定には苦労が伴うのが常であった。講義中にPC操作等で理解できないところがあっても、その場で手をあげて質問し、結果として講義の進行を止めることは学生側にも大きな抵抗があるようである。しかし、オンデマンド形式の講義ではビデオを任意のタイミングで一時的に停止し、あるいは戻って繰り返し見ることが可能なため、学生には履修しやすいと感じられたようである。講義アンケートの結果でも、この点を利点として挙げる学生の割合は非常に高い。

成績評価は対面講義の時と同一のレポート課題を用いて行なった。成績から見ると学生の情報リテラシー技術習得の様子は対面形式と比べて遜色ない、あるいはやや良好な結果となり、オンデマンド形式の遠隔講義は利点が大いことが明らかになった。

今後、COVID-19がどのように推移するかは予断を許さないが、大学の講義は対面が主であり遠隔講義は避難的な措置であるとの考え方には同意し難い。ICTを活用した遠隔形式の講義にも一定のメリットがあり、科目の性格や講義内容に応じて適切な手段を柔軟に選ぶべきである。

病衣のデザイン — 伝統とアノニマス

藤井 尚子 (デザイン学科)

かれこれ10年にわたり、病衣デザインの研究・開発を行っています。病衣とは、入院加療中に患者が着用する衣服のことです。病床が生活の場となるため、現状では、いわゆるパジャマ、浴衣といった寝衣が一般的に用いられています。また、これらの前開き構造が、診療や看護に適するため、入院の際に推奨している病院も少なくありません。しかし、患者自身にとってはどうなのでしょう。病床といえども一日中寝衣のままで過ごすことは、時間感覚が失われ、生活リズムも乱れるだけでなく、お見舞いに来た家族や友人たちと会うことも気が引け、次第に億劫になるなど、対人関係も消極的になっていきます。衣服は、着用者の生活や人格を整え・支える役割を持っているのです。

医療・看護行為を補助しつつ、患者自身でも脱ぎ着しやすい構造には、通常より大きめの袖ぐり（アームホール）が必要となります。しかし同時に、縫れて寝返りを打ちづらくなる、点滴台に引っかかりやすく転倒事故につながることも考えられます。病衣へ応用するためには、着脱時のみ拡大し、着用時は通常の寸法・形態に戻る、伸縮自在なアームホールが必要^{ありまつ}です。このことを実現可能としたのは、伝統染色技法の一つ「有松・鳴海絞」を用いるアイデアでした。

「絞り」は、布の一部を糸などで括り、防染することで模様を染め出す技法で、複雑な道具を必要としないため、原初的な模様染めとして世界中で見られます。「有松・鳴海絞」は、時代の流れに合わせ、絞りの解釈を刷新しながら今日まで続く伝統産業工芸です。'80年代には、それまでの模様染めからテクスチャー（質感）を持つユニークな繊維素材として、伝統産業工芸の技がファッションテキスタイルやインテリアテキスタイルに用いられるようになった「ヒートセット加工」があります。布地の折れ皺が安定的に保たれるため、いわゆるウエストゴムの素材であるポリウレタンに比べ、収縮方向への弾性が小さく、少ない握力・張力で布地を伸展できます。

上記の加工により、容易な着脱性のため大きな袖とアームホールの一部は、絞りによって規則的に折りたたまれた状態となり、着用状態では通常寸法の見た目を保つことができます。また、少ない力で伸縮できるため、身体機能が低減してしまう患者にとっても負担の軽減が見込まれます。



「有松・鳴海絞」を活用した病衣（上衣）

このように、病衣をとおして患者の生活の質（QOL）を高めることを目的に、特に上衣を中心にデザイン・開発してきました。しかし、2016年に、父の入院、その後の在宅での闘病をとおして、患者のQOLを著しく低減させる排泄に関わる課題の一部は、病衣の構造に起因したものであることも痛感しました。従来のパジャマ型の下衣は、寝たままの着脱が困難だけでなく、排泄時には陰部を晒さなければなりません。介護側には必要な手順であっても、患者にとっては自尊心を著しく損なう、屈辱的な行為であったはずですが、介護される立場では拒否もできず、我慢せざるを得ない精神的苦痛は察するに余り有るものでした。

こうした父の闘病・在宅医療の経験から、患者の精神的負担を軽減しうる下衣の開発のために、「アノニマスデザイン」をヒントに再び研究を開始しました。ここでは、特定のデザイナーが存在しないデザインを指します。例えば、民族衣装のように、先人たちの知恵や創意工夫によって洗練・形成された、素朴で本質的な創造活動の中には、多くの無名の人々の願いや祈りが込められているはずですが、今日の下衣の構造・形態に至る過程で、どのような取捨選択があったのか…それらをもう一度拾い集め、見直すことで、新たな発見が得られるはずですが。

注目すべき下衣のアノニマスデザインの一つに、「开裆裤（kāidāngkù）」があります。いわゆるマチが無い、もしくは開いた下衣で、現在では中国の幼児用股割ズボンとして知られています。検査衣に応用した先行事例もみられましたが、このままの構造では、患者の精神的負担軽減は見込めないと考え、2019年2月に中国で実物調査を行いました。時代の美意識に合わせ、多様に展開した开裆裤のなかでも、今日と同様の「履く」構造と浴衣のような「巻く」構造を併せ持つ、清朝末期の子ども用の开裆裤には、患者側と介護側の両面から応用可能な要素が見受けられました。2020年12月に北京で開催された「中華服飾文化国際學術研討会」にて発表し、伝統民族衣装を現代ヘイノベータティブに展開する一例として関心を集めました。今後はプロトタイプを制作し、実装しながら検討していく予定です。

病衣研究は途上にありますが、これからの社会におけるデザインの果たすべき倫理的使命について、アノニマスデザインを耕しながら発信していきたいと考えています。



天藍殿彩绣天花卉纹开裆裤（上海纺织服饰博物馆所藏 / 2019年筆者撮影）

「半円形式」开裆裤（背面）

領域横断のゼミ学生等地域貢献事業への取り組み

黒田 宏治 (デザイン学科)

黒田ゼミでは、過去3年間、佐井ゼミと共同で、ゼミ学生等地域貢献推進事業に取り組んできた。平成29年度は川根本町、平成30年度は掛川市、令和元年度は伊豆の国市の地域課題を対象に、いずれも両ゼミ所属のデザイン学部3年生が総合演習Ⅰの一環として参加するかたちで推進した。

ゼミ学生等地域貢献推進事業とは、公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムが実施する「県内の地域課題について、地域と一体となって、解決策の提言や課題解決のための実践的な研究を行う県内大学のゼミナールに対する」(同事業募集要領より) 助成事業である。採択されると20万円の助成金が得られるとともに、対象地域自治体等との連携のもと実社会の生きた課題に取り組むことができる。参加学生に過大な費用負担をかけることなく、しかも実社会との接点をもち実践的なデザイン課題に取り組むチャンスに恵まれるという、教育推進上も有意義な事業である。

各年度の参加学生数は、平成29年度3名、平成30年度11名、令和元年度6名であった。提供された地域課題に対して、学生個々が各々の問題認識のもとに具体的なテーマを設定し調査研究・企画デザインに取り組む方式とした。各年度の実施概要(テーマ、参加学生)は次のとおりである。

平成29年度：

川根本町「木材を活用した地域創造」

デザイン系学生による地域資源の調査・評価等を行い、川根本町の木材資源の利活用の可能性を企画・検討した。若者をターゲットにした木材加工製品に加えプロモーション活動も視野に入れた。

- ・ 間伐材を利用したお土産「かわねの小森」とミニワークショップの提案(安藤かすみ)
- ・ 絵本をつくる「かわねのき／川根本町の昔話と間伐問題ストーリー」(宮本怜美)
- ・ 廃材を使用した若者向けの川根本町土産ー「香り」のデザイン「カラルカワネ」(吉野晞)

平成30年度：

掛川市「掛川手織葛布の継承に向けた若者からの提言」

掛川市の伝統工芸品である掛川手織葛布の調査・評価等を行い、若年層向け利活用の可能性を検討した。若者が伝統工芸に興味を持てるような商品・用途開発、販促プロモーション、ブランド計画を提起した。

- ・ 若い女性をターゲットにした葛布サシェの提案(岩崎桃子)
- ・ 子から親へ、世代を超えた贈答のプロモーション(パンフレット制作)(杉田みう)
- ・ 葛の糸を利用したランプシェードの提案(南部由衣)
- ・ 子供向けの掛川葛布商品を扱うブランドKAPPUのデザイン提案(商品、パッケージ、HP)(浅井友希)
- ・ 家族を失った人へ、心に寄り添うオーダーメイド品の提案(葛布つまみ細工の花)(浅野青葉)
- ・ 葛葉餅と掛川葛布同封のパッケージデザイン(池田梨央)

- ・ 認知向上と販売促進のためのPR戦略、クーポン券付きフライヤーのデザイン制作(伊藤悠貴)
 - ・ 掛川葛布の生地ブランドKAKEGAWA KUZUFUと新しい販売方法の提案(小野風香)
 - ・ 掛川葛布を手にとってもらおうパッケージデザイン(掛川茶ティーバッグとコースターのセット)(吹田莉菜)
 - ・ 葛布製品のカタログと駅貼りポスターのデザイン(葛布製品を日常に取り込んだ写真)(高千波)
 - ・ 若者に向けた土産「葛布物語(栞)」の提案(野村祐衣)
- 令和元年度：

伊豆の国市「伊豆長岡温泉の再生に向けた地域資源調査」

伊豆長岡温泉の観光事業活性化に向けて、地域資源の調査・発掘等を行い、新たな可能性を企画・検討した。若者向け特産品開発、ブランド計画、体験・サービス・プロモーションなどを提案した。

- ・ 「伊豆長岡温泉 湯ったりきっぷ」の改善案と広報媒体の制作デザイン(大坪史朗)
- ・ 伊豆長岡特有の「まゆ玉」を使ったフォトスポットの提案(ロゴマーク、季節展開等)(熊王菜那子)
- ・ 芸妓さんを身近な存在にする芸妓学校併設カフェ「あやめていー」の提案(小牧かな)
- ・ 「きらび香」を使った地域限定お菓子ブランド「伊豆のぼせいちご」の提案(鈴木彩加)
- ・ 福理亭小川家の新しいビジュアルデザイン(鈴木友香)
- ・ 伊豆長岡温泉「まゆ玉」スタンプラリー(林優歩)

各年度とも、対象地域の関係者からは新鮮に受け止められ、好評をいただいている。地域デザイン・企画調査系の黒田ゼミ(フィロソフィー領域)とブランド計画・視覚伝達系の佐井ゼミ(ビジュアル領域)の共同であるため、プロセスを通じて両ゼミ学生・教員間での相互啓発の環境にあり、企画・デザインの成果は領域横断的で多彩であることも、一つの成果と考えている。年度・課題にもよるが、なかには実現への俎上に載る制作デザイン提案も見られるなど、参加学生に机上の演習とは異なるモチベーションの醸成にも役立っている。

学内で完結する通常の演習授業とは異なり、自治体・関係業界等の地域関係者を前にした現地での最終報告会や、ふじのくに地域・大学フォーラム(年度末のゼミ学生等地域貢献事業の県内合同発表会)に参加してのプレゼンテーション(成果発表)の機会を設けている。これだけでも参加学生にとっては貴重な社会経験であり、また新聞紙面に紹介される場合もあり、学生の励みになるばかりかプロジェクトの情報発信への寄与も少なくないと考えられる。

本年度(令和2年度)も掛川市「掛川手織葛布の情報発信に向けた若者からの提言」に、両ゼミ学生11名が取り組んでいる。幸い大学から行き来しやすい地域でもあり、現地を訪ねての調査・打合せにも熱心である。間もなくまとまるであろうゼミ学生たちの企画・デザインの成果が楽しみである。

「手の愉悦～革新する工芸」展

山本 一樹 (デザイン学科)

本学ギャラリーにおいて2020年10月9日(金)～10月25日(日)の日程で開催された「手の愉悦～革新する工芸」展の総監修をさせていただきます。

これは静岡県文化プログラムの一環で、本来は東京オリンピック・パラリンピック関連事業として7月に開催予定でしたが、コロナ禍で延期されたものです。

内容は、静岡県に縁のある工芸作家34人の33作品を集めた展覧会です。

僕が総監修として展覧会の主旨にあげたのは、以下の3点です。

「大学で開催するにふさわしい展覧会にする。」

「大学は研究と教育の場」です。大学は、過去の事例(伝統)を研究考察すると共に、将来に向けた提案(指針)を示さなければなりません。ただ単に工芸作品を並べるだけの展覧会では無く、学生に対して教育的刺激になり、創作活動の切掛けになるような展覧会にする。

「静岡県の工芸(工芸作家)を広く紹介することで、静岡県の魅力を発信する。」

静岡県内には様々な地場産業がありますが、「伝統工芸」として全国的に広く認知されているとは言い難いところがあります。今回の展覧会では「伝統」のみに縛られること無く、広く「工芸」的な分野を視野にセレクトし、静岡県の「魅力を発見できる展覧会」にする。

「伝統工芸の技術を継承した中でも、クリエイティブな作品を制作している「作家」に焦点を当てる。」

工芸というと「職人」と「工芸作家」が一緒に語られることが多いですが、「職人」と「作家」は根本的に違います。「職人」は同じ物を長く作り続ける中でその技術を高め、作品のクオリティーを向上させていきますが、「作家」はその技術を基に絶えず新しい試みをして、時代に即した新しい美を追求していきます。本展覧会は、「作家」に焦点を当てた展覧会にする。

東京藝術大学の名誉教授から、本学を卒業してまだ4年ほどの20歳代の若い作家まで、年齢も素材分野も異なる様々な作家に参加していただき、魅力的な展覧会になったと思っています。

展示計画に関しては本学の磯村克郎先生に依頼しました。



ギャラリー会場を静岡県に見立て、静岡県の地図を描き、作家の工房のある場所に作品を展示するというアイデアに加え、展示台からスポットライトに至るまで、細かな会場作りで神経を使っていたが、緊張感のある展示会場が出現しました。磯村先生は、3面をガラスに囲まれたギャラリーの特性を生かして周りに壁を作らず、展示台にも透明のアクリル板を使い、近代的で清潔感のある空間を演出してくれました。

図録・チラシ・パンナーなど、グラフィック関係は本学非常勤講師

の星野順啓先生に協力していただきました。このような展覧会では、作家情報の収集がままならないために、結果、画像の統一感が無いグラフィックになってしまうのが一般的です。今回図録に掲載した作品写真は、全て、本学の撮影スタジオで撮影しました。図録・チラシなどグラフィックの一体感は、一人のカメラマンが全てのシャッターを切ったことによるものが大きいです。お陰さまで、統一感のある図録が完成しました。

工芸作品は長い歴史に育まれ、その伝統の上に成り立っています。一つの例が、稲垣有里さんの作品「貝紫染袖織物 臨」でしょう。



この魅力的で鮮やかな紫色は、巻貝の一種、アッキガイのパープル腺から取られた分泌液で染められています。パープル腺とはアッキガイが持つ毒液で、一つの貝からほんの僅かしか取れません。稲垣さんも本作品のために200kgものパープル腺を集めました。貝紫は古代から高貴の色として知られ、クレオパトラやカエサルも好んで身にまとったと言われています。しかしながら、その技法は古くからの記載が存在せず、稲垣さんは試行錯誤の連続で苦勞なさったそうです。

一つの作品を生み出すために多くの事を学び、努力を積み重ねていく姿勢は、学生たちにも感じて貰えると思います。

クリエイティブな作品の例としては、海野えり子さんのジュエリー「音の記憶」があります。



ジュエリーというと、日本では金銀や宝石を思い浮かべることがまだまだ多いですが、ヨーロッパなどではコンテンポラリージュエリーと称して、様々な素材を使って自由に制作するのが一般的となっています。今回の海野さんの作品も、カセットテープを素材にしており、スペインやイタリアで高評価を得ています。

今までの価値観に捕らわれない自由な発想は、学生たちにも良い刺激になったと思います。

デザイン学部では一昨年4月に匠領域が立ち上がり、作品制作を通して技術を伝えて行く工芸的な教育が始まったところですが、この展覧会を機会に、静岡県内の工芸作家のネットワークを作り、静岡県のアート力を上げる一助になればと思います。

活動報告 SUAC Report

『老舗企業の存続メカニズム』受賞報告
および国際比較研究について

曾根 秀一 (文化政策学科)

昨年末に上記タイトルで執筆依頼を頂戴し、あらためて受賞報告させていただきます。またこれに加え、現在進めている国際比較研究についても簡単に述べたいと思います。

2019年3月に出版された拙書、『老舗企業の存続メカニズム—宮大工企業のビジネスシステム—』（中央経済社）に対し、昨年度（2019年度）は、日本地域学会賞、ファミリービジネス学会賞、日本ベンチャー学会清成忠男賞、今年度（2020年度）は、中小企業研究奨励賞本賞、企業家研究フォーラム賞を賜りました。過分なる評価を賜り、背筋が伸びる思いです。拙書出版に際し、本学出版助成をいただくとともに、日頃よりご支援、ご協力賜りました先生方、事務局の皆様、学生、卒業生の皆様に心より御礼申し上げます。

拙書は、宮大工を源流とする4社（金剛組、竹中工務店、松井建設、大彦組）の老舗企業がいかにして伝統的技能を継承しつつ、時代の変化に対応して存続しえたのか、その存続メカニズムを経営学と経営史学の融合の方法を意識して論じたものです。とくに、幾世代にも渡る継承に着目し、承業経営者、第二創業などをキーワードに研究を進めてきました。これらの結果は現代企業にも多くの示唆を与えるものではないかと考えております。賞にも恥じぬようこれからも研究に精進し、ご恩返ししてまいります。

近年の研究の展開についてですが、ここ10年は科学技術研究費のテーマからも長期存続企業の国際比較研究を行ってきました。わが国は、周知のとおり世界一の長寿企業大国として知られます。では、日本に次ぐ第2位（200年以上存続の企業）はどこか、それはドイツです。他にも10位以内には、スイスやオーストリアといったドイツ語圏も含まれます。このため、ドイツ語圏の企業の特徴や長寿性について調査、研究してきました。

その成果の一環として、本年3月には、『現代ドイツ語圏企業の経営—同族企業の企業統治類型と経営戦略—』（共著）（中央経済社）を出版予定です。

ドイツでは、中小あるいは小規模のファミリービジネスが経済活動の重要な下支えをしてきました。また、ドイツの中堅企業の世界市場リーダーに着目したSimon（2013）は、「Hidden Champion（隠れたチャンピオン）」と名付けて、ドイツが際立った輸出業績を出し続けている基盤の要因に中堅企業の世界市場リーダーがあると指摘しています。こうしたことからドイツは

中小企業の国であると、ドイツ国民の多くが自負しています。同国の中堅、中小企業を表す代表的な用語として、「ミッテルシュタント（Mittelstand）」も注目されています。このミッテルシュタントとは、大企業と一線を画し、同族性を持った、「中堅企業」や「中小企業」としての意味を指し、独立性、従業員の満足度、雇用維持や創出などで評価されています。これらの企業体は、2000年代のドイツ経済のバックボーンの形成、躍進を支えることでも知られます。

また、日本とドイツの共通点は多々みられます。例えば、資本主義の形態、企業統治の考え方です。フランスの経済学者アルベールは、利害関係者全体を重視し、存続を第一義とする日本やドイツ企業を「ライン型」とし、株主利益の最大化を重視し、成長・拡大を目指すイギリスおよびアメリカ企業を「アングロサクソン型」と称して分けています。

さらに、拙書でも記しているように、継承方法にも類似点が見られます。わが国の多くの老舗では、長子相続を基本として、1人に絞った継承方法が主にとられてきました。逆に、子息全員に均等相続することは家が分散し、やがては小さくなって潰れることから、「田分け」とされ、存続においてご法度とされてきました。

実はドイツにも同様の継承方法が見られます。ただし、ドイツと一言で言っても、元々の国や宗教も異なります。例えば南バイエルン（ドイツ南部）では、カトリック系の家父長主義をもとに、日本と同様、継承を1人に限定する相続の慣習があります。このことは、後継者争いが生じにくく、早くから継承の準備ができるという利点があり、家産の分散を防ぐ意味合いもあります。このため、同地域には、数多くの長寿企業が今も残っています。これに対し、フランケン地方（ドイツ中南部）では、プロテスタント系の家族主義も相俟って、子供の人数に応じて均等に配分することで、家（土地）が小さくなっていき、衰退、消滅が散見されます。また、紙幅の関係上、割愛しますが、伝統的な家共同体制度の慣習、財務上の保守性、地元地域の重視（土着性）、人材育成の方法、職人精神の醸成など興味深い共通点が多々あります。

こうした長寿企業の背景にある地域や文化的要因を探り、比較研究することで、企業存続の本質がみえてくると考えます。今はコロナの影響で、研究に制約がかかりますが、これまでの成果を精査できると捉え、日々精進していきたいと思っております。

令和元年度 文化・芸術研究センター事業実績

〈イベント・シンポジウム〉

イベント名	代表者		実施内容
	学科	氏名	
SUAC映画祭	芸術文化 学科	高島 知佐子	<p>日程：7月19日（金）～12月15日（日）</p> <p>会場：浜松いわた信用金庫板屋町支店研修ホール、黒板とキッチン、静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター内瞑想空間</p> <p>主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター</p> <p>助成：（公財）はましん地域振興財団、（公財）浜松市文化振興財団</p> <p>協力：黒板とキッチン、浜松いわた信用金庫、（公財）浜松国際交流協会、ゆりの木通り商店街</p> <p>内容：7～12月に7日間の映画祭を開催した。作品を上映するだけでなく、上映後に毎回、映画にちなんだワークショップやトークイベントを行うことで、映画祭を通じた文化理解と地域交流を深めた。</p> <p>参加者数：延べ143人</p>
UD絵本コンクール2019 UD絵本WSの開催	文化政策 学科	林 左和子	<p>日程：（表彰式）11月16日（土） （展示会）11月16日（土）～11月22日（金）</p> <p>会場：静岡文化芸術大学 ギャラリー</p> <p>主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター</p> <p>後援：静岡県、静岡県教育委員会ほか</p> <p>内容：子ども部門12点、高校生部門7点、一般部門9点の計28点の応募があった。その中から、審査委員長特別賞2点、子ども部門優秀賞1点、佳作2点、高校生部門優秀賞1点、佳作1点、一般部門優秀賞2点、佳作1点選ばれた。11月16日～21日の6日間、応募作品の展示会を本学ギャラリーで開催し、143人の来場者があった。なお浜松市役所および東京・大崎のゲートシティ大崎での展示会は中止となった。</p> <p>同時開催：UD絵本WS 日程：5月18日（火）～9月28日（土） 会場：浜松市立図書館14館、磐田市立図書館、静岡県立中央図書館で合計16回実施した。 来場者数：151人 参加者数：延べ190人</p>
「デカセギ」の30年、 過去から未来へ	国際文化 学科	池上 重弘	<p>日時：10月26日（土）～11月4日（月・祝）</p> <p>場所：静岡文化芸術大学 ギャラリー</p> <p>主催：在浜松ブラジル総領事館、静岡文化芸術大学</p> <p>内容：在浜松の日系ブラジル人写真家ジュニオール・マエダ氏が撮影した写真パネル90枚を通して、日系人「デカセギ」の30年を振り返り、新たな外国人受け入れが始まる日本社会におけるブラジル人コミュニティの今後を考える。</p> <p>同時開催：シンポジウム「『デカセギ』の30年、過去から未来」 10月26日（土）14：00～17：00 静岡文化芸術大学 南棟176大講義室 日伯交流ピアノコンサート 10月27日（日）14：00～ 静岡文化芸術大学 講堂 演奏：赤津スティーノフ樹里亜（ピアノ）</p> <p>参加者数：延べ1,500人</p>
フェアトレード 全国フォーラム2019 in Hamamatsu	国際文化 学科	下澤 嶽	<p>日時：11月30日（土）10：00～18：00</p> <p>場所：静岡文化芸術大学 講堂</p> <p>主催：静岡文化芸術大学、浜松市、はままつフェアトレードタウン・ネットワーク、（一社）日本フェアトレードフォーラム、フェアトレード学生ネットワーク</p> <p>内容：当大学が日本初のフェアトレード大学なったことを受けて、フェアトレード全国フォーラムの一部企画として、パネルディスカッション「若者、学校でのフェアトレード」を実施し、若者、教育機関にとってのフェアトレードの意義と可能性を訴える。</p> <p>参加者数：250人</p>

イベント名	代表者		実施内容
	学科	氏名	
浜松市の中山間地域再生の可能性と課題についてのシンポジウム 「2020まちむらりレーション市民交流会議～浜松の中山間地域の可能性を考える～」	文化政策 学科	船戸 修一	日時：1月20日(月) 13:30~17:00 会場：静岡文化芸術大学 講堂 主催：浜松市、静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 内容：天竜区佐久間町のある集落における船戸ゼミの調査結果を発表した。この発表ではアンケート調査から、帰郷意志の有無に関わらずその意志を親に伝えることが難しい理由を説明し、その意志を表明することで集落維持につながる方策を提案した。 参加者数：180人
メディアデザインウィーク2020	デザイン 学科	長嶋 洋一	概要：学生作品の展示、関連分野の専門家による講演、ワークショップで構成されるイベントで、今年で8年目の開催となった。 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：(公財)浜松市文化振興財団 【学生展示】 日時：2月6日(木)~10日(月) 12:30~18:30 会場：静岡文化芸術大学 ギャラリー 内容：本学デザイン学部3・2年生作品を中心に展示・上映を行った。 【ワークショップ】 日時：2月8日(土) 13:00~18:30、2月9日(日) 10:30~16:30 会場：静岡文化芸術大学 マルチメディア室 講師：長嶋 洋一(本学デザイン学部教授)、照岡 正樹、辻下 守弘 内容：メディア、デザインの領域で注目されている「スケッチング」(物理コンピューティング)をテーマとしたワークショップを開催。 【講演会】 講演1「アニメの演出に関する講演」 日時：2月6日(木) 18:30~20:30 会場：静岡文化芸術大学 南棟281中講義室 講師：増井 壮一(アニメ監督) 講演2「DJの世界、DJの魅力に関する講演」 日時：2月7日(金) 18:30~20:30 会場：静岡文化芸術大学 南棟281中講義室 講師：廣田 利佳 Licaxxx (DJ、音楽家) 講演3「情報通信技術の発達に関する講演」 日時：2月10日(月) 14:40~16:10 会場：静岡文化芸術大学 講堂 講師：西 和彦(東京大学IoTメディアラボラトリディレクター) 参加者数：延べ300人
多様な「科学」に関する啓蒙的な複合イベント	デザイン 学科	的場 ひろし	日時：3月31日(火)~5月29日(金) 会場：静岡文化芸術大学 図書館・情報センター内 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 内容：本企画は、一見すると難しく感じられる科学のトピックスを、デザインの工夫によって分かりやすく展示する試みである。第2回目となる今回のテーマは「私たちの視覚」。「眼」と「脳」の複雑なプロセスによって成立している視覚の全体像を「通し」で把握できるように、親しみやすいイラストを基調にした横長図表(5.2m×1.2m)を作成した。図表の作成には、浜松医科大学 光先端医学教育研究センターの針山孝彦特任教授、玉川大学 脳科学研究所の小松英彦所長・教授に監修者としてご協力いただいた。図表を図書館内の展示スペースに掲示し、興味を持った内容について知識を深めることのできる工夫として、図書館の蔵書から、視覚に関連する約50冊の陳列もあわせて行った。 参加者数：延べ353人

〈地域貢献・連携事業〉

イベント名	実施内容
<p>第19回特別公開講座 新作能「竜宮小僧」</p>	<p>日時：10月9日（水）18：30～ 第一夜 10月10日（木）18：00～ 第二夜 会場：静岡文化芸術大学 講堂 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 運営：静岡文化芸術大学 薪能プロジェクトチーム 後援：静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、中日新聞東海本社、静岡新聞社・静岡放送 内容：第19回目の開催となる今回は、9日（水）に「能講座」として、椋山女学園大学教授の飯塚恵理人氏による講演『東海地域の能楽史』や、本学学生による新作能「竜宮小僧」のストーリー解説などを行った。翌日10日（木）には、新作能「竜宮小僧」の上演を行った。この新作能「竜宮小僧」は、地元浜松久留女木（浜松市北区引佐町）にゆかりのある「竜宮小僧伝説」をもとに、能楽師で本学芸術文化学科教授の梅若彦彦が書き下ろした新作能で、今回が初演となった。 参加者数：480人</p>
<p>前期公開講座 「匠とデザイン」 全2回講座</p>	<p>日時：7月13日（土）13：00～ 第1回「布のデザインと匠の技」 7月27日（土）13：00～ 第2回「日本を創った漆芸文化」 会場：静岡文化芸術大学 南棟176大講義室 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：浜松市 内容：第1回は本学の藤井尚子准教授による染色を中心とした技術の説明と今後の取り組みについて講演があり後半は質疑応答がおこなれた。第2回は東京芸術大学名誉教授三田村有純氏による漆の歴史などについて講演がなされ、後半は本学の小田伊織講師とのトークセッションを行った。 参加者数：230人</p>
<p>後期公開講座 「Shizuokaから発信する これからのユニバーサルデザイン」</p>	<p>日時：10月5日（土）14：00～ 「色弱のお医者さんに学ぶカラーユニバーサルデザイン」 10月26日（土）14：00～ 「音のユニバーサルデザイン化」 11月16日（土）14：00～ 「社会・地域・産業の観点から考えるモビリティ」 会場：静岡文化芸術大学 南棟278大講義室（第1・2回）、講堂（第3回） 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：浜松市 内容：（第1回）講師の東京慈恵会医科大学教授の岡部正隆氏から、色弱がどのようなものでどう世界が見えるのかについて講演した。 （第2回）講師のヤマハ(株)の瀬戸優樹氏より、今までは考えていなかった“音”についてのUDの考え方が取り入れられていることに参加者は驚いていた。 （第3回）講師の(株)モビリティの森口将之氏より日本及び他国の事例や開発状況が紹介され、講師のヤマハ発動機(株)の長屋明浩氏よりデザインと自動運転の開発の最先端について講演があった。また最後に本学の谷川憲司教授との鼎談があり、参加者からの質問に答えた。 参加者数：275人</p>
<p>夏季公開工房</p>	<p>日時：9月1日（土）～2日（日） 会場：静岡文化芸術大学 自由創造工房 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 内容：①「銅版画を制作しよう」 講師：佐藤 聖徳（本学デザイン学部教授） ②「石膏デッサンを描いてみよう」 講師：山本 一樹（本学デザイン学部教授） ③「テキスタイル 手織りに挑戦！」 講師：種村 興治・桑原 壽子（テキスタイル外部講師） 参加者数：33人</p>
<p>春季公開工房</p>	<p>中止</p>

イベント名	実施内容
文化・芸術セミナー 「室内楽演奏会2019」	<p>第1回「はじめてのジャズ／アドリブを楽しもう」 日時：5月27日（月）19：00～ 会場：静岡文化芸術大学 講堂 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：浜松市 出演：村松 健（ピアノ） 杉山 慧（ギター） 参加者数：210人</p> <p>第2回「篠笛の世界／「伝統」から現代へ」 日時：12月14日（土）15：00～ 会場：静岡文化芸術大学 自由創造工房 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：浜松市 出演：大川 琢也（篠笛） M i s a（ピアノ） A k i A u s t i n（ギター） 飯塚 みほ（ダンス） 参加者数：87人</p> <p>第3回「交差する打楽器の世界」 日時：2月2日（日）14：00～ 会場：静岡文化芸術大学 講堂 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：浜松市 出演：桂浦 誠（ヤマハ㈱B&Oマーケティング&セールスグループ） 西 裕之（ローランド㈱第1開発部長） 峯 郁郎（本学デザイン学部教授） 的場 ひろし（本学デザイン学部教授） 参加者数：132人</p>
文化・芸術セミナー 「調律師村上輝久のレクチャーと 田村明子のピアノ・コンサート」	<p>日時：12月12日（木）18：30～ 会場：静岡文化芸術大学 講堂 主催：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター 後援：浜松市、（公財）浜松市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社 K-mix、FM Haro! 出演：村上 輝久（調律師） 田村 明子（ピアニスト） 参加者数：350人</p>

工芸展関連企画

「先端技術展 — 技人（わざびと）たちの物語 —」

峯 郁郎 (デザイン学科/文化・芸術研究センター)

今回の東京2020オリンピック・パラリンピック運動、静岡県文化プログラムの一環としての県域プログラム、手の愉悦展—革新する工芸—の関連企画としての先端技術展、技人（わざびと）たちの物語は、静岡文化芸術大学の恵まれた立地を活かしたユニークで学びの多いイベントとなりました。

県域プログラムディレクターの大岡 淳氏と企画内容を検討させていただいた中で、本学ならではの展示とは？ということから学生たちによる企業取材を軸に、周辺企業の中で活躍の技術者をピックアップさせていただき、両学部専門性を活かした目線で広く市民の方々にお知らせするというコンセプトを進めることになりました。企業の選定基準はショールームや工場見学コースを一般に公開しているメーカーを優先し、出来るだけ幅広い業種の取材を行ないたいという考えで進めましたが、結果的には図らずも県西部に集中してしまいました。

楽器メーカーや移動機器メーカーは複数のブランドを取材していますが、内容の重複を避ける為のコントロールをあらかじめ教員側で行なっています。

<ねらいと成果>

文化政策学部とデザイン学部はそれぞれ違った視点で世の中を考察し、実践的な学びを通して将来社会に貢献しようとしています。今回それぞれの立場で取材を行ない、一般的な企業リサーチを超えた深掘りが出来たこと、機械化のイメージが先行する生産現場に手仕事が生きていること、よく知っているブランドに新しい発見があったことと同時に、一般的にあまり知られていないブランドに迫れたこと、等々ゼミで対応された教員、学生も含めて様々な発見と再確認が出来たと思われ、人脈、ネットワークの構築も進みました。基本的には訪問企業を分担しましたが、中には複数企業の取材を体験した学生もいて、カテゴリーや風土の違いを肌で感じる事が出来たのではないかと想像されます。

<反省点など>

コロナ禍において最終的に11社の取材となりましたが、企画段階では2倍くらいの候補も検討しており、いくつかの取り

こぼしも否めません。また、実際に取材を行なった学生たちによるギャラリートークや、企業側からのプチプレゼンやデモンストレーション等も構想の中にはありましたが実現には至りませんでした。取材内容を画像や文書にまとめることは出来ましたが、口頭で発表する機会を設けることが出来れば、今後の様々な場面でのプレゼンテーションの実践経験にもなったのではと思います。

<今後への展望>

ふだん課題やアルバイト等で忙しい学生たちも、そんな中で今回参加してくれたメンバーはとても得をしたのではないかと想像します。今回の貴重な体験が学生間に口コミなどで広がることも期待したいと思います。

昨年度末から今年度はコロナの影響で残念ながらピチャラ会が開催出来ませんでした。今回の取材、展示による総合的な学びは、今後も大学教職員、学生、地域、あらゆるキーパーソン等を繋いで、今と将来について考え話し合える機会へと展開出来ればと考えます。



編集後記

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響で多くのイベントが中止・延期を余儀なくされ、この「文化と芸術」も諸般の事情により合併号という形で発行することとなりました。

その中で静岡県文化プログラムの「手の愉悦—革新する工芸—展、及び関連企画の「先端技術展—技人（わざびと）たちの物語—」を多くの議論を経て、かつ、コロナウイルス対策も施した上で、開催できたことは大変嬉しく思いました。

多くの来場者の方が展覧会やイベント等を渴望されており、それに応えたことで、当初の予想より多くの来場者を迎え入れて盛況のうちに終えたのは望外の喜びであります。

今後のイベント等においてもコロナウイルス対策を常に念頭に置いて開催しなければならないですが、オンライン・対面を上手に使い分けて、多くの人々が楽しむことができるイベント等を企画していきたいと思えます。

(K, M)

Art & Culture

文化と芸術

文化・芸術研究センター
ニュースレター

Vol.32・33

March 2021

発行：静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 地域連携室)